



第九号

はまのうらと

梅貝と

海光と

わか故里



鵲沼

鵲沼を語る会 〇〇

大震災前後からの鵠沼海岸（二）

高木和男

相模女子大教授

私が鵠沼海岸の地に初めて来たのは大正七年（一九一八）の夏であった。・・・

伊東将行の称功碑の建設に頭山満の題字で、武州川越の人で（大正六年

十二月と題字に書かれ本年七月病没とある。なお伊東将行の業は長谷川欽

一承其事業と書かれている。この碑を作るためには当時この地に土地を求めた財界人の

多くが名をつらね四二名が数えらる。この建碑賛助者の名を当時この地に土地を持ち、別荘を

持った人たちを知るために主なものの名を記すことにする。

長谷川欽一、各務幸一郎、金杉英五郎、高瀬弥一、田中常德、

馬越恭平、益田信也 後藤武夫、郷誠之助、木下利吉

菊本直次郎 三觜愛太郎 柴垣愛太郎 慈教庵 広岡助五郎

久松忠漢

「長谷川欽一承事業」ということで、昭和十四五年まで長谷川さんは東家をやっていたが戦争も激しくなりそうなところで、東家旅館を廃業して広い敷地を分譲してしまった。戦后 伊東将行の親族の人が 以前から、自分の家の

別荘だったところを改造して現在のところに東家旅館を再興したとゆうことになる。

この山の下に人力車夫の小舎があつて車夫が何時も数人待っていた。この車夫をやっている人は藤沢近郷の農村の次男、三男というところで、鵜沼海岸では

銭がかせげるというので出て来た人である。はじめは建築や下手間などをやっていて金が溜ると人力車を買つて人力車夫となった。それゆえここにいる人力車夫は出世した人達である。同時につてを求めて別荘番の仕事をして、家と女房を獲得した人たちである。電車がつくところの人達がたちまち出て来て、車を並べる。そして車をつら

ねて別荘入りということになる。三井さんの別荘が出来た頃はまだ江ノ電が出来ていなかったの（江ノ電は明治三十五年）国電の藤沢駅から人力車で来たそうだ。

この人力車の営業は、小田急が昭和四年にひけるまでつづいた。鵜沼海岸の銀座通りは今よりも道巾も三、四尺狭く、両側にはまだ松山が多かった。

伊東氏による鵜沼海岸の開拓は、現在の鵜沼公民館の道路までであつたらしく鵜沼の現在の商店街の道路は、この道路のところで終つて、堀川の方から来た道

路と食い違つていた。そして銀座通りのつき当りのところに安場人足屋（寿屋と云つた）が大きな構を持っていた。

銀座通りの西の端の北側には斎藤百貨店とゆう大きな店があつて、味噌、醤油から雑貨までを売っていた。斎藤は鵜沼小学校近くの斎藤大地主の

親類とか聞いていた。今は宝屋になっている。東の方に来ると南側に魚岩とゆう魚屋があつた。今の渡辺雜貨店のところである。その東の四ツ辻の東側は山口屋とゆう雜貨店があつて、この店は、店の前を巾二m位のヨシ簀で張つてあつた。土地に余裕があつた証拠である。

今のスズキヤのところである。この南側は鵜沼饅頭を作っていた餅菓子屋で中野という人が店主であつた。今のグリーンストアのところである。

鵜沼饅頭の隣、今のマリヤ化粧品のところから大石雜貨店まで

のところは、中屋旅館の地所で中央のあたり、今の魚久あたりに瓦屋根のついた立派な門があつた。中屋の裏門は川崎邸の方の道

路についていた。山口屋の東側は玉生邸でこの邸を囲むように細い道路が、横町から銀座通に通じていた。これは今はなくなっている。

（裏側の道路は残っている。）その道路の東側に関根タバコ店があつ

て、老人夫婦がタバコを売っていて、また雜貨も売っていた。

タバコ屋と土地の人は言っていたが、気のよいおじさんであつたが、古くから

なかつたようである。タバコ屋の東側は角まで松山で海岸通の

松山はここが最も最近（戦后）まで残った。今のハマダ洋品店

写真屋、蒲団屋のところである。今の有田商店のところは、大正八年の頃は芦が生えていたところで今の八百利のところに有田商店が、名月庵とか言つてそば屋をやつていた。

有田は藤沢大鋸の出身と聞いたが、当時からの鵜沼コンツェルンで土地のブローカーを今の当主の曾祖父がやつておりしかも仕事師もやつておつた。祖父の人が身体が丈夫でなかつたので、曾祖父の跡をついで、土地ブローカーをやり同時にそば屋をやつていたが、弟が仕事師をやつていた。今のタバコ屋のお婆さんはその仕事師の妻君であるが不幸にも主人は若い頃に亡くなられた。

このそば屋の名月庵は、大正九年には道路向ここの芦原を開いて店を作つて、そば屋をやめ肉屋をはじめた。同時に洋食の職人を入れて、洋食の食堂を作り、出前もやつた。岸田劉生の鵜沼日記に出てくる洋食屋であつて、私も食べたが味はよかつた。缶詰などを始めたのは当主の父親の代からである。

明月庵の跡は今の八百利になつて、今の当主の祖父が始めた。今の郵便局の処は空地だつたと思う。その西側、今のクリーニング屋とペンキ屋のところは、田中とゆう人の別荘が奥の方に建つていた。

その西側の角のところが広岡さんの居宅で、この人は引地にある醸造会社へ今の「大和醸造」の大株主だったようで、大変羽振りが良かった。有田の東側は空地で、こちらの角のところは、クリーニング屋から角まで、また奥行きは小田急線までを、たしか有田別荘が占めていた。図に示した馬越と云うのは馬越恭平で大日本ピールの社長であり、菊本は三井の重役と聞いていた。金杉は耳鼻咽喉科の金杉博士で木下は宮内省御用の大工さんだったとの事、益田は三井の益田で大磯に邸宅がある。ここにも広い家があったそうだ。（五十帖）が外からは見えなかった。その向い側（北）の角は駐在所があった。久松は久松侯爵、後藤は東京興信所、内藤は松屋の重役、今でも残っているのはこの家だけである。この家はアメリカから買った組立家屋で、土地の人は内藤さんと言わず組立家屋と言っていた。東家はこゝの開拓者伊東の親類になる。はじめは伊東の直系がやっていたらしいが私の知っている頃は長谷川とゆう人がやっていた。後に長く町会長になった。

（つづく）

鵠
沼
海
岸
地
図

鵜沼の野草（その三）

——引地川左岸（国鉄々橋から鵜沼橋まで）——

伊藤節堂

昭和五四年四月五日付神奈川新聞に「暴れ

川退治に国が総合対策」の記事がのった。

その内容は、建設省は五十四年度から対策

の急がれている都市部の河川を、全国で九河川

指定し、八年間で改修するというのである。

この九河川の中に境川と引地川が選ばれ、引地

川には百十億三千万円がつぎ込まれるという。

引地川はご承知のように、大和市上草柳の台地を

源流とする二級河川であるが四十八年十一月豪雨や

四十一年四号台風など、その都度浸水さわぎを起こ

した暴れ川である。

さて河川改修というのは、河川の幅を拡げたり、

護岸を整備したりするのであるが、護岸をコン

クリートブロックで築き上げると、もうそこには草

も木も生えることはない。年々歳々川の流れ

は変わらないが、歳々々々野の花は一つつつ姿を

消して行く。こどものころに摘んだスミレも

タンポポも遠いむかしの想い出として懐かしむだ

けである。

いまのうちに記録に残さなければと考えた私は、

昨年五月二十日から十月九日まで六か月に亘って観

察した。なぜならば春夏秋冬それぞれ、草は芽

を出し花を咲かせているからである。

昨年は富士見橋上流の改修が完成したが、富士見

橋上流の鉄橋までの左岸には十八種の雑草があった

ことをここに記録しておきたい。

一、ヨモギ	(キク科)
二、セイヨウタンポポ	(")
三、ノゲシ	(")
四、ノボロギク	(")
五、ブタク	(")
六、クワモドキ(オオブタクサ)	(")
七、ノコンギク	(")
八、キクイモ	(")
九、オナモミ	(")
一〇、オオアレチノギク	(")
一一、ヒメムカシヨモギ	(")
一二、ハルジオン	(")
一三、スイカズラ	(スイカズラ科)
一四、ヘクソカズラ	(アカネ科)
一五、フタバムグラ	(")

一六、オオバコ	(オオバコ科)
一七、オオイヌノフグリ	(ゴマノハグサ科)
一八、シソ	(シソ科)
一九、ヒメオドリコソウ	(")
二〇、オドリコソウ	(")
二一、ハマヒルガオ	(ヒルガオ科)
二二、コマツヨイグサ	(アカバナ科)
二三、マツヨイグサ	(")
二四、メマツヨイグサ	(")
二五、アレチマツヨイグサ	(")
二六、ノブドウ	(ブドウ科)
二七、カタバミ	(カタバミ科)
二八、カラスノエンドウ	(マメ科)
二九、スズメノエンドウ	(")
三〇、クズ	(")

三一、ツルフジバカマ	(")
三二、テリハノイバラ	(バラ科)
三三、ナワシロイチゴ	(")
三四、ナズナ	(アブラナ科)
三五、マンテマ	(ナチシコ科)
三六、イノコスチ	(ヒユ科)
三七、シロザ	(アカサ科)
三八、スイバ	(タデ科)
三九、ギシギシ	(")
四〇、イタドリ	(")
四一、シロバナイヌタチ	(")
四二、タマスダレ	(ヒガンバナ科)
四三、ヤブカンゾウ	(ユリ科)
四四、ツルボ	(")
四五、ツユクサ	(ツユクサ科)

四六、アゼガヤツリ	(カヤツリゲサ科)
四七、チガヤ	(イネ科)
四八、ササ	(")
四九、ススキ	(")
五〇、ヨシ	(")
五一、チカラシバ	(")
五二、エノコロケサ	(")
五三、キンエノコロ	(")
五四、メヒシバ	(")
五五、オヒシバ	(")
五六、キツネガヤ	(")
五七、ネズミノオ	(")
五八、スギナ	(トクサ科)
五九、オシロイバナ	(オシロイバナ科)

あとがき

武者小路実篤の「春」という詩の第二節の中心に

「自分は庭に出て、

泥をほったり、

池の鯉をとったり、

浜へ出てぼーふをとったり、

つみ草に出かけたりすることも好きだ。」

とある。

これは詞書きにもあるように、鵜沼に住んで

おられたときの作であるが、当時竜宮橋を渡

った砂丘地帯にはハマボウフウが採り切れない

ほどあったと思う。

ところで昨年の四月一七日朝七時半サイクリング

道路を歩いていてハマボウフウを二株みつけた。

場所は地引網の船が据えられるところから二桝目

の砂防簀垣の中である。このあたりは冬に

ブルトナーで砂丘を削ったところであるからひよっと

したら千年前の種が太陽のぬくまりで発芽

したのではないかと奇異な感じさえした。さて

これを保存するにはどうすればよいかなどと、振り

返りながらその場を去った。それから十一日たった

四月二十八日再びここを訪れた私はあつと驚いた。あの

若々しいハマボウフウが二本とも掘りとられてあと

かたもないのである。

千年前の延喜式にも載った相模のハマボウフウを

私たちの世代で一本も残さず絶やしてしまうことは

何としても情けないことである。——完——

(五五、一、七記、鵜沼松が岡五)

私は生きるために東京へ出てきた。生きるためであつた。

そのために私は長靴をトンネルの中で弊履の如く捨てたのだつた。

私は長靴を抱き締め、声を殺して泣いた。私の涙に長靴を濡

らし、いくつもいくつも、しみをつくつていった。それは笑顔であり、泣き

顔であり、鳥海山であり、雄物川であつた。その古い懐かしき、

傷ついた青春を、私は弊履の如く捨て、しかも未練を残して泣き続け

たのであつた。昭和二十六年九月八日、上野行夜行列車の汽笛は悲しかった。

東京での落ち着き先は東上線下赤塚駅から北に一軒ばかり

のゴミ捨て場跡であつた。父がなけなしの十万円を不動産屋に渡した

が骨組みをしただけで建ててくれない。土地は坪五百円、百坪で五

万円でそんなに高いとはいえなかったがなにしろゴミを捨て、埋め立てた土

地だから悪臭がして井戸をついたが水も飲めない。周囲五百米位は

畠で家は一軒もなかった。もちろん電灯など入らないからローソク暮し

であつた。まあなんとか住めるには住めたがまさに掘立小屋同然であつた。

当然家の周囲は泥々であつた。

ここでまた長靴での生活が始まる。家中の長靴が必要であつた。

便所など建ててなかつたから庭の隅に穴を掘って野グソである。雨の

日などひどかつた。私は当時四才の末の妹が私の病気に感染し、やや腸

結核気味だつたから「お兄ちゃんポンポン痛いよ。」と言われ長い間妹を抱えてしゃがみ込んでいたのは忘れない。

私の病氣もいいとは言えなかつた。手術跡の腹の傷はふさがらず、銭湯などに行くと水が入ってしまう。とにかく結核の傷口はがん固に治らなかつた。膀胱も痛み、暖まっていっても二十分毎に小便がしたくなつた。

したがって夜などほとんど寝られない。長靴をはいて寒天の星の下を歩きまわる夜もあつた。しかし、昼間の私に二つだけやる仕事が出来た。一つは、不動産屋にかけ合つて中途半端の家を引き取ってもらつて十万円をとりもどし、新しい住み家を見つける事であつた。私の病氣のため二つ下の弟は下宿、一まわり下の弟は湘南片瀬の祖母の家に預けられていたが当然まともな家を見つけて一家が集まらなければならぬ。私は毎日通つた。不動産やは十条にあつたが私は、

電車賃がないから歩いて通った。東武練馬から上板橋、中板橋を通り十条

の通りにぬけた。道が悪いから長靴であった。それだけにいろいろの場所を

歩いた。東武練馬一帯は武蔵野の面影を残す丘陵と雑木林が点在

していたがあとは荒涼とした麦畠であった。もちろん麦は霜柱にへばり

つき、北風は冷たかった。不動産屋はするそうな男であったか、なんとゆうか馬が合っ

たとゆうのかだんだん親切にしてくれ、時にはお茶や、お弁当まで出して

くれた。私のもう一つの仕事は大山にある都立豊島病院に通うことだったから不動

産屋に着くのがちょうど十二時すぎか一時頃までとなる。私は弁当持参だった

から初めは不動産屋の隅で冷たい飯をボソボソ食べていたか食後に飲む薬が

きっかけで話し合う事になった。

ストレプトマイシンは六十本も打ったからこれ以上使用できないからと病院ではパスと

ヒドロジットを併用するようにとくれたが、も一つ膀胱炎にきくからとえらい色素の

強い粉薬をくれた。緑色であったがそれを飲むと小便は緑色であった。

駅の便所などで小便をすると隣の人が驚いて小便をやめ後ずさりした。顔も結

核特有のコゲ茶色にその緑色がまざっていたからきつと凄まじい顔だったに違いない。

河童、ちょうど骨と皮だけの体だったから、古池が泥沼から這い上がった河童が人間世界にまぎれ込んでいるようなものであった。

板橋あたりはやくざが多く、早目の銭湯に行くといれずみのアンチャンやトッサアンも多かったが私を見るといづれも黙礼して場所をあけた。なにしろ

腹の傷は一尺五寸、それがふさがらず時々血うみがふいているのだからヤクザならずとも気味悪がつた。それに小便がしたくなると面倒くさく隅でやってしまったがそれが緑色ときていたからそれをみて驚いて、飛び出すヤクザもいた。不動産屋の前は流れの悪いドブだったが、そこに一時間に二、三回は私の緑色の小便がたまるのだから不動産屋も気がついて「これは何です」と言う話になった。これこれの薬で便器などについたら落ちないからと説明

すると「それは困った。」とそれでも裏の空き地に穴を掘って私専用の便所を作ってくれた。

そんなに毎日ひつつこく通って、一度もその不動産屋といさかいを起さなかったのは、きわめて馬があつた（それは人生の敗残者共通のいたわりであつたかもしれない）のと私がきさくに人に物を頼まれる性分だったからである。

三十半ばの不動産屋はいまだに独身で一人できりもりしていたが時々、外へ出かけなければならない。そんな時「ちよつと伊藤さんるすばんして、下さい。」となる。るすに客が来ても不思議と私にはその客を引き止めていく術を心得ていた。板橋あたりはそんな高級な借家も下宿もなく、まあ来る客も生きるのがせいーぱいの間人ばかりであつたから私の話とよく合つた。それに東北や北陸地方からの上京者が多かつたから私の秋田弁も大変役に立つた。そんな客が不動産屋には商売になつたようである。

私は十月十一月十二月一月と四ヶ月不動産屋に通つたが最後の一ヶ月などまるつきり自分も不動産屋になり切つていた。母も始め弁当を持って行つたのにだんだん持つて行かなくなり、時にはすしの折りなど持参して帰るのを不思議に思つていたらしいがとりたて、聞くうとはしなかつた。秋田時代から私の行動には一切干渉であつたからである。私は妹に毎日何かのおみやげを持つて帰れるのが嬉しかった。そしてそれでダメしてパスを飲ませるのであつた。妹も薬嫌いでガンコで齒をくいしばつてパスを拒んだが私のおみやげにつられて飲むようになり下痢も治つてきた。一月の末に不動産屋が「やつと

売れ口を見つけました。」と言った。そして「三月一ぱいに立ち退いて下さい。二ヶ月のうちに二人で貸家を探しましょう。」と言ってくれた。そして十万円その他に私に五万円くれた。父の月給がその頃一万五千円くらいだったから五万円は大金であつた。不動産屋は「私がこの商売を始めて、初めて損をした取引でした。しかし、伊藤さんによつて商売になつた話もいくつもありますし、この頃他の同業者からうらやましがられる位お客が来てくれます。それよりも、私は伊藤さんによつて新しい生きる力を与えられました。」と涙ぐんだ。

この不動産屋は一流私大を出てサラリーマンになつたがだまされたのかだまされたのかして出世コースから外れたらしかつた。づるそうに見えたのは人間不信と警戒の念であつた。そして、「一日も早く健康となり学問の道に復帰して下さい。」と手を握ってくれた。

私は好意を深く謝し、「私もずい分あちこち歩きましたから自分で探します。」と言つて翌日から二度と不動産屋に行かなかつた。噂では後年その不動産屋は大きな財をなしたそうである。春眠曉を覚えずにはまだ少し早かつたが茨屋の廻に菜の花が咲き揃う頃、私達一家は新しい借家を見つけて引越したのであつた。弟妹の学校も近く環境もすばらしかつた。しかしこの家が大変な家だったのである。

つづく。

一九八〇年の会員の声

山口三郎

私も今年満八十才の齡を迎え次のような事が思い出された。「奢る平家久しからず。」今日本は平和だ裕福だと奢っているが昨今の世界情勢を見てこれから日本はどうなるかと考える度に身の毛がよだつ。お互いに自分の事ばかり考えずお互いに助け合って生きていこうではありませんか

鵠沼の松

須貝敬

鵠沼の代表的とも思われる松の大木を何とか切らないでもらいたい。小生が鵠沼に来た初めには十五、六米もある立派な松の大木が一寸と眺めると見る

ことができたが、最近では人家も激増枯れた木も多く、切られたためかどんどん姿を消し激減して誠に悲しい何とかこの少ない松の大木の保存の方法は無いものでしょうか。

郷土史の研究

川上清康

鵠沼を語る会では昨年度、文学歴史、地震等といろいろ興味ある貴重な研究を進められ大いに敬意を表しております。

唯時間の関係で参加致せず申し訳けなく思っております。

一方藤沢写真集が発刊されたり藤沢文庫が逐次出版され郷土史に関する意欲が高まって参り心強く感じて居ります。

鵠沼の厂史、研究も更に今年
は深く進んで参る事を期待し
私も出来る限り語る会に参
加致したいと思っております。
改めて幹事各位の御努力に感
謝致します。

鵠沼二題 持田まさお

昨年五月、国立近代美術館の岸
田劉生展で鵠沼における多くの
作品に接し、更に感興を深くして
このゆかりのあたりを歩きまわつてみ
た。

松落葉童女麗子の傍りし丘

村娘於松が砂の薯掘れる。

俳人渡辺水巴は、昭和二十年四
月鵠沼七、三二八番地に疎開
し終戦に先だち翌年八月

十三日仮寓で六十五才の生涯を閉
じた。江戸ッ子水巴が強制疎開で、
湘南の松と砂の間に病を養いながらの
晩年の句から鵠沼を探りだしたいと
思っている。

盆用意さ、やかながら水巴の忌

鵠沼風月 太田太郎

() 鵠沼地域で消滅又はそれに近い
もの。

(A) ハマボーフウ、シヨロ、クゲヌマラン

(B) 広い松原(松林と其中的の散歩道)

(C) 桃畠、古池と其中的の生物、植物類

(D) 純和風の家屋、門、生垣、竹垣

(E) サラサラとした砂浜と貝類

(ドロやゴミや油のない)

以上について所在御存知の方は是非
教えて下さい。

春の寿

伊藤 昌

元旦から四日までのサッカー部の練習が
終って、私の正月とゆうか初仕事は歌
舞伎の観劇となった。華やかな初
春を飾った踊りと箏曲の「春の寿」の
三楽「八千代獅子」、「六段の調」、「阿
蘭陀万才」をたっぷりと楽しませても
らった。私は箏の音色の中に或る感
慨に浸っていた。私の父は東北の農村出
の生粋の軍人で全く武骨の人間であ
ったが二つだけ趣味があった。
一つは尺八であった。軍務の余暇に懸
命に習ったらしく、私が生まれた頃、二十六
才位であったが、龍山と号し、師範の免許
を得ていた。私が小学校の頃、表札に
伊藤龍山と書いてあって友達たちから変

な名前「りゅうやま、りゅうやま」とはやされ
た。（龍山は父が始めて赴任した朝鮮の地
名だった。）戦地から、時々帰ってくる度に
名古屋の放送局に出ていた。

中国戦線で、父と叔父とが再会して二人で
尺八を合奏している写真が新聞に載
った事もあった。

「戦場に風流あり」などの見出しも
覚えている。

母も琴を習っていた。子供では、尺八は音
が出ないので母の琴をいじくり廻している
うちに私も、いつしか「六段の調」や「千鳥
の曲」を弾けるようになった。

中学時代に胸を患った私はとうとう尺八は
口にすることが出来ず、父に「尺八だけは
教えてやりたかった。」と残念がられた。

父はこんなに無秩序

の時代に生きる私を予測していたのかもしれ
ない。三年前に父が死んだ時、古
ぼけた母の琴の横に、も一つの父の趣
味の菊が枯れかかっていた。私が、

本格的に草花作りを始めたのは、その時からであった。

江の島の海 花輪桂

昭和五十五年を迎えて、

月満ち秋風そゞろ冷きを

江ノ島の海千鳥しばなく

これは去年の秋の夕どき暫くぶりで江の島に散歩したおりの感慨である。歴史を刻む昔の人達はこの様な情景をどんな思いで眺めただろうか。今は車の洪水と絶え間ない騒音と、ビルや店舗のネオンや照明が輝き、安き心もなく

余りにも息苦しい時代で、人々は自然の絶妙な安らぎを味ふ事もないのかも知れないが等々考えたものである。私は鵜沼にもう三十年余り住み、生活、活動の大部をここで過し、娘達を片づけ、只今、趣味三昧に生きて、藤沢、特に鵜沼を限りなく愛するものであるが、二十年程前から鵜沼の浜辺、引地川界限、竜口寺等の水絵を、七、八点描いたが、時々これを出してみても、今の景色との変化に吃驚させられている。

去年から「鵜沼を語る会」に参加して、諸兄姉の造詣蘊蓄を拝聴して大変啓発させられました。今年か鵜沼藤沢の寺院史でも勉強して出さうればこの「語る会」で報告してみたいものと思う。最早、これも私の鵜沼と藤沢とへの御恩返しの一つかも知れない。

（ ） 鵜沼地区で発展していたべき
たい事

他地区では御婦人方（主に若い方）
が有機農業（無農薬農業）

の推進に多大の努力を払い

着々と成果を上げ、今やサンパー

ルビルの地下に無農薬の茶、み

そ、しょう油、す、うどんの売場を

設けることにこぎつけている。（ア

キツ農研）どうか鵜沼でも「食

品公害」の講義や「パン焼きの実

習」をどしどし開いて下さい。

カタワやガンや脳卒中（私のような

よいよい）が増えては「鵜沼を語

る」どころではなくなるでしょ

う。

私の江の島神社初詣発願由来

佐藤 清

私は隅田川の両国橋にほど近い

浜町河岸の対岸を川口にして

東に通づる運河聖川に架る一

之橋（一ツ目）塩原多助ゆかりの塩

原橋、次に二之橋（二ツ目）の南岸

本所に明治三十七年辰年に生れ

た。家の西方（一ツ目）橋畔に亭々と

そびえた銀杏の巨木の下に人工洞

窟内に弁財天を祭る池のある

（ミニ江ノ島）の杉山江ノ島神社が

ある。この神社は杉山和一が江ノ島

天女の祠に詣でて断食祈願し

夢に管と鍼を授けられ、その

神徳により鍼管術を創

案して、時の將軍綱吉の病を治

療功を奏して將軍から汝は
目が不自由だから一ツ目を与え
るとこの領地を屋敷として与
えられた Parody な賞賜であり
その地に祭られたものである。
又、家の南方には村岡にある弥
勒寺と同じ寺名の境内の広大
なる寺に杉山検校の墓があり
幼時にはこの寺や寺を遊び
場として関東大震災まで過
したものであるが残念ながら今
は往時の面影はない。
まだ小学校え上る前の明治四
十三年（一九一〇年）夏の夕にあの
大銀杏と並立して低空に螢
をさかさまに立たせた形で光っ
ているものを見て子供心に
怖かったのを覚えている。

当時大人達は大凶事の前兆と
うけとめて大騒ぎしていた。
これがハリー彗星であり、周期が
惑星の摂動で多少の変動があ
るが平均七十六年周期で地球に
近づくのを後に知った。
又大正期の関東大地震級は学
者により六十八年周期説（+）（-）
十三年の誤差で起こる可能性を知っ
たのである。
去る昭和五十二年は辰年であり当
時の男子の平均寿命は七十二才の
発表があり、その年が丁度年
男であつたので幸に元氣であり、身体
に何等の違和も感じない健康
なので大いに慾張りもう一巡の干支
を迎えることを願って元旦初詣
を江ノ島神社と定め一二年間
自宅から往復徒歩で参拝出来る

ることを願って干支の絵馬を戴いて帰る習慣を始めてもう四年、辰、巳、午、未、申、と五枚を居間に掲げて長寿を祈り、最終の絵馬卯の絵馬を掲げることのできるのを祈願している。そして幼少から因縁のある江ノ島神社の地でその年の訪れるハレ―彗星を再びこの地で見ると幸せを併せて祈っている。但し大地震は周期の誤差の大きい方を願って、勝手な人間の「さが」をむき出しにしているが、これが私の発願の由来と後六年大いに自重します。

鵜沼地域を永住地に決めた理由 富永速雄
私は辻堂太平台二ノ一、同地の一番高い所に住んで毎日鵜沼を、町をみて居ります。
十数年前会社の定年退職が近いので東京の騒がしさと公害的（その当時は未だ公害騒ぎはなかった）状況から脱出した老後生活は、暖かくて空気の良い湘南地方でと考えまして、戸塚区の深谷町（横浜ドリムランド東側台地）に土地を求めましたが交通の便が悪くあまりにも土深かい感じをしましたので智的文化的な香りがした海に近い塩害が少ない所が好ましいと考え地形諸施設、道路関係、東京との距離等々を考え東湘地域を種々の角度から調査研究して、鎌倉、逗

子、葉山方面より地域、地質方位等から鵜沼地域、特に太平台の台地は適合して優れて居ると判断した次第です。古い土地台帳で鵜沼地域に入って居たのを知りました。これ等の知識を少しでも役立てられればとも考えまして昭和四〇年に宅地主任の資格を取り趣味に不動産業（三栄商会不動産）を営んで居ります。

昭和五十五年を迎えて

大宮三郎

鵜沼を語る会は鵜沼を愛する人の会だと思えます。その歴史を語り、地理

を語り又住まわれた高名な方を語るのも鵜沼を愛する心のほとばしりだと思えます。

会で皆様の話を聞き一層

鵜沼に愛着を覚え、すこしでも認識を深めたいと思っております。

鵜沼と私

富士山

私は鵜沼の現住所付近に移り住んだのは大正十一年九月でした。その翌年関東大震災にあったわけです。移った当時六〇〇軒ばかりの家がありました。全部こわれ、てしまつて淋しい限りでした。

職務上（開業医師）その六〇〇軒の名

は大体知っていました。

昭和になってから家もぼつぼつ建つようになり現在では一万軒もあるわけですが、東京の郊外と違った感じですが、うた、感慨にたえません。たゞ遺憾に思うのは大正の終りから昭和の始めにかけて近隣の親しみとゆうものがあり、今でも患者として芥川竜之介、弘田弘毅氏などの印象が強く頭に残っています。

それが、家ならびに人が増加すると近隣の親しみとゆうものは消え失せ隣は何をする人ぞとゆう風に一般的に変わってしまったのが残念です。まだ公害のないのがせめてもの慰めです。

新しいプランを期待する

飯田心美

「鵠沼を語る会」については機関紙をはじめ種々のお世話のおかげで内容々充実しまことに欣びに耐えません。小生鵠沼に関しては住居の日も浅く、戦前はもちろん、明治、大正時代の関係智識が得られたらと思うことしばしばです。いままでは時折催される例会で皆様のお話だけ聞いて帰ってまいりましたが、若しこれに加えて往時の記念写真や文献資料も入手できたら貴重な参考となるでしょう。ひとつ藤沢周辺の古老でそうした資料所有の方があつたら公民館で取材されたいかがでしょう。そして一応まとまったところで分類、整理され種類

別にして例会の時のテーマをきめるようにしたらはつきりとしてくれると思います。蒐集費が、よ
うなら実質負担をするのもやむをえないことで、その辺の実行プラン御検討くださるよう提言いたします。

昭和四五年を迎えて

鈴木繁次郎

一、江の島付近の発展のために江の島の周囲に道路を新設する。

二、ゴミを焼いて出る熱を利用して温水プールを建設したらどうか。

あとがき

一九八〇年という新しい年がやってまいりました。

この機関紙もコツコツと手作りで書き続けこの号で第九号となります。

会員の皆様方の熱意で益々盛だくさんとなり、次から次へと充実していくものと楽しみです。

第一号は昭和五十一年十月に発行されました。その頃からの念願でした鵜沼公民館建変え工事もいよいよ本年四月着工、来年三月完工となります。私も運営審議委員として建設委員として無事役目を務めさせていただき嬉しく思っております。厂史に残る公民館「鵜沼を語る会」にしたいと思っております。

(リーダー伊藤昌)

昭和五十五年一月三十一日発行

藤沢市鵠沼海岸三丁目一〇番三四号

藤沢市立鵠沼公民館内

鵠沼を語る会

電話（36）七四三一